

## 2. タオルとの出会い

### 今治に住んでいるから当たり前のようにタオル業界に入ったけれど、タオルについてはまったくの素人からスタート

川原敏子氏が中学校を卒業した1950年は、今治のタオル業界は戦争の痛手から徐々に回復しつつあったときであり、波方周辺でもタオル工場が少しずつ増えていた。そうしたなか、中学校を卒業した女子のほとんどがタオル会社に就職する時代となり、川原氏も当たり前のようにタオルの仕事に就いた。就職先は、今治の老舗タオルメーカーのひとつであり、波方町に本社を構える今井タオル工場だった。

今井タオル工場は、1899年に縞反織物工場として創業されたが、1918年にタオル製造を専門とする工場に転向した。今治タオルの歴史を振り返ると、まず1894年に綿ネル製造業者の阿部平助が綿ネル用織機を改造し、余り糸を使ってタオルを試織したのが今治におけるタオル製造の嚆矢である。その後、1912年に中村忠左衛門が先晒しの縞タオルを考案して現在の今治タオルの原型が整えられた。それ以前は、タオル生産で先陣を切っていた大阪の泉州タオルの模造品にしか過ぎなかったが、先晒縞タオルの登場によって、今井タオル工場のように綿ネルや広幅綿織物からタオルへ製造の主軸を移す工場が増えていった。



中村 忠左衛門

今井タオル工場は、戦中の企業合同によって「今井タオル」の名称で存続したが、終戦を迎え1945年に単独のタオル工業として「今井タオル工場」となり再スタートを切った。そして、1951年に今井タオル株式会社に法人化され、自社ブランドをいくつも展開する今治を代表するタオルメーカーに成長し、現在に至っている。

さて、話を戻そう。川原氏は、今井タオル工場で製織技術者とし

て職を得たのはよかったが、タオルについては何も知らない、まったくの素人からのスタートだった。今井タオル工場では、当時、電気を動力源とした新旧の力織機が何台も設置してあった。新しい力織機は広幅のもので大判のバスタオルなら3枚分、フェイスタオルなら6枚分を製織でき、古い小幅の力織機ではフェイスタオル2枚分を製織できた。現在の革新織機に比べるとスピードは格段に劣るが、初めて力織機を目にした川原氏にとっては、目が舞うほどの速さだった。

最初は、準備工程の管巻きの仕事を覚え、つぎに力織機を使った製織の技術を修得した。毎日、必死でタオルづくりについて学んだ。苦しかったが、強い責任感と仕事ができる感謝の気持ちから、途中で投げ出そうと思ったことは一度もない。

朝の8時から昼の1時間の休憩を挟んで夕方5時まで、日曜日以外はタオル工場でタオルと格闘する日々がつづいた。およそ10年間に及んで製織技術者としてタオルづくりに携わり、最終的には「見回り」を担当するほどの腕前になっていた。見回りとは、おもに製織時に何らかの機械の不具合が発生したらすぐさま対応したり、製織されたタオル生地に異常があったら直したり、いわば現場の班長のような役割である。

今井タオル工場で目一杯仕事をして帰宅しても、農繁期には農作業が待っていた。とくに、田植えと稲刈りの時期は忙しく、会社が休みの日曜日と祝日は納屋か田んぼに必ずいた。たまには「朝のゆらくら、晩のしらくら」になろうとおもっても、川原氏の人生においてそんな暇も余裕もなかった。

### 3. 退職、結婚、そして新たなタオルとの出会い

## 結婚を機に退職し、しばらくタオルとは無縁の生活

就職後も家事や農作業などの手伝いで多忙な日々を送っていた川原氏に転機が訪れたのは、23歳の誕生日を迎えるちょうど前のことである。年頃を迎えていた川原氏は、親戚のつてで「お見合い」をすることになった。1950年代初頭の女性の平均初婚年齢は23歳であり（厚生労働省『平成25年度版 厚生労働白書』58頁）、ほとんどの女性が結婚する時代だった。そして、「お見合」の結果、川原氏は、実家のある波方町から自動車で30分ほど離れた市内の八町出身の慧<sup>さとし</sup>氏と1959年1月15日に結婚した。川原氏が現在も住んでいる場所である。

結婚をきっかけに今井タオル株式会社を退社し、いったんタオルとは縁のない生活を送った。1961年に長女・直美氏、1963年に長男・功氏が誕生し、家業の米づくりに従事しながら、子育てや家事に多事多端な日々を過ごした。

## 思い立って、中忠に電話

農作業には繁忙期と端境期があり、端境期には少し自分の時間をつくることができた。近所でタオル縫製の家内労働をやっている家があり、いつも窓越しからその様子を見ていた川原氏は、ある日「これだ！」と思い立ち、タオルメーカーの中忠（株）に電話をかけて問合せをした。すると、当時中忠の社員でタオルの配送を担当していた木下正男氏（「タオルびと」2019年4月号～7月号に登場）がすかさず川原氏のもとにやってきた。

商談はスムーズにいった。木下氏との出会いによって、仕上工程の縫製担当として新たにタオルづくりに携わることになった。そして、夫と夫の父親が、いまも仕事場として使用している離れのスペースを川原氏のために改造し、そこに工業用ミシン一台が設置された。川原氏の記憶によると、1961年から1962年にかけての出来事であり、副業ではあったが川原氏の縫製技術者としてのキャリアがスタートした。

木下氏との思い出には、つぎのようなエピソードがある。川原氏がタオル縫製の仕事を始めた頃、タオルに縫い付けるタグは細い木に巻かれた状態でタオルメーカーから支給されていた。ある日、このタグが足りなくなったので中忠に電話を入れ、「宅配してくれる木下さんおいでですか？」と川原氏が尋ねたら、開口一番に「いま、新婚旅行に行っておらんですよ」との回答が電話に應對した従業員の男性から返ってきた。「結婚してなかったんじゃな」と、旅先の木下氏を想像して川原氏は微笑ましくおもった。こうして、木下氏が中忠を退社するまで二人のやりとりがつづいた。

川原氏が、縫製の仕事に興味を持ったのは、時間を自由にコントロールできる点にあった。農業がおもな仕事であったため、こちらを疎かにするわけにはいかない。家事も子育ても手を抜くわけにはいかない。タオル縫製は、副業として自宅で作業ができ、自分のペースで仕事ができる。少しでも余った時間で何かできないか、と考えた末の選択だった。

タオル縫製の繁忙期は、通常、年に2回ほどやって来る。中元と歳暮の時期である。中元の場合、5月の連休が終わり6月にかけて徐々に縫製依頼の数が増え、7月いっぱいには目が回るほどの忙しさである。歳暮の場合、10月末から11月にかけて増加し12月中頃まで手一杯となる。しかし、川原氏はどんなに急ぎの依頼が入っても限られた時間のなかで手際よく作業を遂行した。若い頃は、フェイスタオルのサイズで一日400枚から500枚くらいはお手の物だった。早朝に縫製前のタオルが持ち込まれると夕方には仕上げて納品する、といったペースで作業をこなしていた。

縫製は農作業の合間の仕事だったが、川原家では米だけでなく麦もつくっていたため、川原氏の実質労働は、繁閑の区別なくほぼ年中無休状態であった。しかも、毎日遅くても早朝4時に起きて家事をこなし、午前中に農作業を終えて午後にはミシンに向かう。季節によってその塩梅は多少変わるが、家事、育児、農作業の間で少しでも手が空けば作業場でタオルを縫う。こうした生活スタイルを、

病気ひとつせず何十年もおこなってきた。

家事、子育て、農作業、縫製という、いくつもの仕事を切り盛りしながら、川原氏は辛いとおもったことはない。「そんなに辛いとおもわなかった。みんなに助けてもらって自分ができるんやな、という気持ち。『縫うてやりよる』という気持ちで内職やっている人もおると聞いたけど、それは逆。人さまの仕事をしよるんじゃからね。人さまに認められて仕事をやらせてもらえてる、と有り難くおもわんといかんね。」

ところが、病気とはまったく無縁だった川原氏は、1989年に大きな病気を患った。ある日、どういうわけか座っているだけで苦しくて、横になると少しましになるが、どうにもしんどい。そこで、愛媛県立今治病院でまず検査を受け、2回目のときに検査結果を告げられたが、心臓に直径3cmほどの腫瘍が見つかった。そして、即入院を余儀なくされ、愛媛県立中央病院で7月27日に手術をおこなった。幸いにも、手術は成功し病気を克服した。それまで一度も大きな病気をしたことのない丈夫な川原氏だったが、1年間のブランクを経験し、縫製の仕事も小休止をもらった。（次号につづく）

